

## 菱川師宣による徒然草図制作について

阿美古理恵（国際浮世絵学会）

菱川師宣（?～1694）は、風俗画家としてのイメージが強い。しかし、他方で師宣は古歌・物語・故事説話等、古典画題を積極的に描き出していた。古典を絵画化する師宣の姿勢には、好色あるいは滑稽に描く卑俗化の志向と、既成の流派による典雅な図様を継承しようとする志向の、二つの面が見出される。本発表では後者の姿勢に着目する。

師宣が活躍した江戸時代初期、後水尾院を中心に宮廷で発生した古典文化復興は將軍家や大名にまで広がり、古典文学が流行し、これらを題材とした絵画作品の需要も急速に高まっていた。やまと絵をお家芸とした土佐派や住吉派はもとより、狩野派に至るまで古典画題の作品を手がけている。

古典文化復興の動向と師宣の活動との関係を探るため、師宣が制作した徒然草図に注目する。菱川師宣筆「雑画卷」（中村正衛氏蔵）には、和漢の多様な画題を描いた16図が収められている。この内、従来、稚児物語の場面かと紹介された図がある。この図には、稚児が見物するなか地面を拝む僧や、宝物をもって逃げる男達が描かれている。これは、僧が御室の稚児を誘いだして遊ぼうと埋めておいた宝物を盗まれるという、徒然草第54段に取材したものと考えてよいだろう。延宝8年（1680）刊・師宣画『大和絵つくし』所収の徒然草第四十五段の図は、松永貞徳が制作した徒然草の注釈書『なぐさみ草』（跋文・慶安5年（1652））の挿絵を参考に描かれたことが日野原健司氏によって指摘されている。「雑画卷」に描かれた第54段の図も、『なぐさみ草』の挿絵と多くの共通点が見出せる。「雑画卷」の他の図を『なぐさみ草』の挿絵と比較してみると、三猿の図にも第77段の挿絵との類似点が確認できる。

江戸時代初期、徒然草の活字本や注釈書が矢継ぎ早に出版され、各種の徒然草図や兼好法師像等が大量に制作された。元来、土佐派のレパートリーの中には徒然草図はなく、住吉派の祖となった如慶が、徒然草絵巻を独自に作り出したと推定されている。また、住吉具慶筆「徒然草図下絵」（齋宮歴史博物館蔵）の図様の源泉となったのは、『なぐさみ草』の挿絵であることが指摘されている。

住吉派の興隆には、後水尾院による古典文化復興が大きく関わっていた。具慶と貞門の俳諧師・北村季吟との交友も見とめられ、具慶の徒然草図には、貞門の俳諧師による徒然草解釈が反映されている。師宣が徒然草図を制作するにあたり、『なぐさみ草』の挿絵を参考としたのは、それが版本であり、入手しやすかったことにもよるが、住吉派と貞門の俳諧師との関わりを意識してのことではないだろうか。師宣の徒然草図制作について考察することにより、在野の町絵師である師宣が当時の古典文化復興の流行に、どのように乗ろうとし、いかに絵画制作の需要拡大に努めていったのかを明らかにしたい。